

健康や知的喜びを欲求している。この要求にポイントを置いた活動が今の自治会には求められており、こうした活動が他の運動の発展にもつながるのではないか。コミュニケーションがない所には運動はない。今の港南台では、「文化」がコミュニケーションの潤滑油だと思う。

幸いに「二一街区の有効利用」を当面の活動目標にした「港南台文化会議」が発足した。この運動が、

## 「まち1986」を読んで——木下好夫

港南台地区に係る報告を読んで、公団による地区の建設が始まってまだ十数年という、若い港南台の住みよい街づくりにかける地域団体リーダーの心意気を再認識することができた。これはまた、同地区に住む私にとって常々感じていたことでもある。

自治会・町内会の活動状況が一覧で示されているが、既に成熟し、伝統のある地区と比較して、港南台地区は、会報の発行、事業の実施状況

より多くの地域住民が参加できる運動として発展し、同地に建設される「文化施設」が、港南台地区の総合的な発展をもたらすことを期待したい。

「タウンニュース」紙も、微力ながら港南台の発展のために寄与できればと思っている。

△「タウンニュース」・港洋新聞社代表▽

とも断然多い。今自分たちの住むこの地区を、人間性を回復するための生活拠点として捕えることのできるよう助長し、また、この地区で生まれ育った子供にとって、港南台こそふるさとであるという意識を形成するための努力が、各種事業の実施状況からうかがうことができる。

自治会主催の各種行事が紹介されているが、私の住む団地で一番人気の高いものは、団地まつり（夏まつり）であろうか。まつりには、ここ

数年本格的なおと神輿と、子供神輿が団地内を練り歩く。そして、神輿が団地を一周すると、次は小学校

低学年以下の子供を対象とした、人氣アニメを描いた山車の登場である。子供たちは、山車の前後に何百人もが群がり、ロープを引いて、やはり団地内を一周する。出発点まで戻ってくると、自治会のおばさんたちから、アイスクリームやスイカがもらえるのである。今年六歳になる我が娘も、アイスクリームが気に入ったのか、二歳の頃から毎年参加している。

また、個人のプライベートがしっかりと守られ、ともすれば連帯意識も希薄になりがちな集合住宅において、住民相互の交流と、手短な自然とのふれあいの場を提供しようという趣旨で、報告書には紹介されていないが、管理組合の主催で手抜き除草の日が設定されている。年三〜四回、日曜日の午前中、団地の芝生へ出て雑草を抜くのである。参加者は、草むしりをしながらおしゃべりをしたり、子供たちは、ミミズやコ

オロギに驚いたり、それぞれが結構エンジョイしている。

報告の中でも述べられていたが、自治会事務を補助員で対応させていることと同様に、管理組合の事務もまた、委託されている。一方、業者委託も可能であろう草むしりについては、サラリーマンにとって大切な日曜の半日を共同作業で汗を流すことが選択されている。そこには、かつての村社会のように、個人の自由を犠牲にした上で成立っていたコミュニティは否定するが、人間性を尊重した連帯意識・公共意識については、積極的に育んでいこうという共通の認識があるように思われる。

このような行事や共同作業に参加していくなかで蓄積された多様な事柄が、子供たちにふるさと意識を芽生えさせることとなり、また、地域コミュニティの創造、連帯意識の醸成へ大きな役割を果たすこととなるのであろう。

昭和六十一年七月十八日、十九日、ちようど団地の夏まつりが開催されると目を同じくして、私の勤務する

中和田支所（現在の泉区役所）裏駐車場は、「いずみ夏まつり」の参加者で賑わっていた。この祭りは、新しい泉区を構成する地域の人々が、お互いの交流とふれあいを目指して企画した祭りである。

「新区誕生に当たって、これまで違う地域・立場で活動し、生活してきた人々が新しいコミュニティを創造するために何かイベントが開催できないだろうか」という問いがある。ある会議で区民から投げ掛けられた。こうした問い掛けにこたえるべく、区役所内部で、いくつもの実行可能な事業を検討し、連合自治会長、青少年指導員、体育指導委員などの住民代表で組織する実行委員会に諮った。実行委員会では、私たちの提案した幾つかの案を取捨選択し、地域の実態にあった形に修正し、泉区誕生に合わせて、夏まつり、新区誕生祝賀会、文化祭など六つの行事を連続して実施することを決めた。その第一弾がいずみ夏まつりである。こうして、ルールが敷かれると、地域の人たちが積極的に行

動に移った。一番の問題は経費であるが、これは、実行委員会のメンバーが地元企業、団体等に協賛を依頼して回るということになった。また、企画からまつり開催日まで準備期間が短かったにもかかわらず、地域の人たちの精力的な活動により、まつりは成功裏のうちに終わり、実行委員会は、休む間もなく次の行事である泉区開設記念祝賀会の準備の取り組みに入った。

このように、私の体験している、地域における三つの事例を紹介したが、私の住む港南台地区と、勤務する泉区では、町の歴史も、構成している人も全く違っている。一方の地域での最善の対応が、他の地域においては全く意味をなさない場合も十分考えられる。今、行政に必要なことは、地域特性を確実に把握し、住民の潜在エネルギーを引き出して顕在化していく能力を備えることではないだろうか。

報告書のなかで、体育指導委員が「行政の予算には、区の自主事業のように、うまくつつつげば出て来る

部分がある。こうした予算のからくりを地域活動をしている人が知って、つつついていくといい」と述べているが、このように地域リーダーが自分の置かれている立場をよく理解し、活動をより充実したものとするため、行政に働き掛けてくる事例も、区の市民課では多く体験するところである。

また一方では、青少年指導員が適切に活動が出来ていない事柄や、自治会役員が毎年変わって活動がマンネリになっている事例も紹介されている。

このように、地域の置かれている状況は千差万別である。一面で活動が停滞していると見える地域でも、他の面での活動が活発になされている可能性のあることは十分予測できるところである。また活動が停滞し

ていても、何かきっかけがあれば活性化できる可能性を持っている地域も多数あることはよく経験するところである。

この、地域のもつ潜在エネルギーを顕在化するためには、何よりも、地域のおかれている状況を的確に把握することが必要である。これまでも、区役所においては、市民課、福祉課、区政推進課等でそれぞれの所に係る地域情報については、把握に努めてきたところであるが、本報告書を読んで、「重層的構造」を持つ地域に対して、行政として適切な対応をするためには、このような各セクションの保有する情報の一元化の必要性をあらためて感じたところである。

△泉区市民課地域振興係長▽

## 「まち86」を読んで——石崎和彦

住みやすい街にしたい、魅力のある街にしたい。それは誰もが願っていることであろうと感じ、いろいろ

な街の人々が様々な形で努力をしているのだということが、具体的に理解でき、非常に参考になりました。